

2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
人間健康学部	教授	松永昌宏
最終学歴	学位	専門分野
広島大学大学院生物圏科学研究科 博士課程後期修了	博士（学術）	健康情報学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

働く人の多様化、働き方の多様化、そしてデジタルヘルステクノロジーの進展の中、これからの健康確保の在り方が問われている。時代の転換期に直面していることを受け止め、人々の健康を守り、人生を支えるために何が必要となるのか。従来の医学のみでは解決できない種々の健康問題に対し、医学・生命科学・情報科学・社会科学・人文科学を包括した教育を実施することで、人の健康を支えるための人材の育成に取り組む。

【目標】

乳幼児から高齢者まで人間の健康に関する基本的な知識を十分身につけるとともに、情報を活用した新しい健康問題に対する解決方法について学ぶことを目標とする。

【方針】

座学に加えて体験学習を通じて、習得した知識を基盤として応用可能なスキルへと発展させていく。

【計画（方法）】

講義内で健康状態を可視化できる機器を実際に体験し、その情報を用いて効果的に健康状態を改善できる方法を学ぶ。また、オンライン授業の工夫や、外部講師（ゲストスピーカー）の招聘、学外で行う多様で実践的な学習活動を取り入れる。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

わたしたちの身体、人間健康特講Ⅰ、人間健康学、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ

（後期）

環境保健論、人間健康特講Ⅱ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ

○教育方法の実践

- ・オンライン以外の講義では、なるべく体験型の講義を心がけ、学生が体験しながら自ら学んでいく姿勢を養った。
- ・ゼミにおいては、健康状態を機器を使って可視化し、どう自分の生活習慣を改善したら数値が改善するのかを実践させた。
- ・環境保健論では、自分が興味がある環境問題について自分で調べ、その解決策について考えさせた。
- ・人間健康特講Ⅱでは、講義で培った知識をもとに、地域や大学が抱える問題に対してどのように

すれば問題解決につながるか考えさせた。

- ・すべての講義において、外部講師（ゲストスピーカー）による授業を実施し、学生に様々な視点から学ぶ機会を提供した。

○作成した教科書・教材

すべての授業において、30枚前後の講義資料を作成した。

○自己評価

授業評価アンケートの結果を見ると、環境保健論においては、「あなたはこの授業の受講によって、学ぶことへの興味・関心(意欲)が高まりましたか」という問いに対する回答の平均値が5段階評定で4.73であった、また、人間健康特講Ⅱでも4.5であったため、学生の興味・関心を惹きつけるよい講義ができたと思われる。一方で、配布資料が分かり辛いという指摘もあったため、来年度は配布資料を分かりやすくする工夫をし、より学生にとって興味深い講義ができるように心がける。

II 研究活動

○研究課題

社会的感情表出に関連する脳機能の同定

○目標・計画

【目標】

我々の心は、常に認知・感情・行動の3つの要素の連動により動いている。その中でも感情は、冷静な認知を妨げるようなマイナス面が指摘され、認知より一段劣ったものとして扱われた時期があるが、近年では人の適応を生み出すというプラス面が注目され、数多くの研究がなされるようになってきた。感情および感情の表出は個人の健康や社会生活に影響を及ぼすものであり、人は自らの感情状態をコントロールすることを社会的にも個人的にもなされている。自らの感情状態をコントロールすることを感情制御(emotion regulation)といい、感情制御を、より特性的に表出・不表出という側面から捉えたものが感情表出性(emotion expressivity)である。我々の最近の研究により、社会的状況に関連する感情(幸せ・怒り・親しみなど)の表出(自分がどのように感じているかをジェスチャーや顔の表情を使って示すこと)と、個人の置かれている社会的環境に関連した健康状態や疾病・不適応状態が関連していることを示す知見が得られている。しかしながら、脳機能や脳構造、感情表出性、健康状態や疾病・不適応状態との関連を示す知見は、我々の知る限り今のところないと思われる。これらの背景を踏まえて、基礎研究として日本人の社会的感情表出に関連する脳機能や脳構造を同定することを目標とする。

【計画】

名古屋大学脳と心の研究センターにおいて、大学生を対象とした機能的MRI実験を実施し、日本人の社会的感情表出に関連する脳機能や脳構造を同定する。

○2018年4月から2026年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

松永昌宏. 分担執筆. 第2章:生理学的メカニズム—中枢神経系(p.60,61), 遺伝子(p.62,63).

健康心理学辞典（編集：日本健康心理学会）。丸善出版。2019。

松永昌宏。分担執筆。第1部：脳神経の構造と機能—第1章：脳の構造と役割。公認心理師の基本を学ぶテキスト⑩ 神経・生理心理学—脳から心を理解する（監修：川畑直人・大島剛・郷式徹、編集：中島恵子・矢島潤平）。ミネルヴァ書房。11-22。2022。

（学術論文）

Matsunaga M, Masuda T, Ishii K, Ohtsubo Y, Noguchi Y, Ochi M, Yamasue H. Culture and cannabinoid receptor gene polymorphism interact to influence the perception of happiness. *PLoS One*. 2018 Dec 21;13(12):e0209552.

Matsunaga M, Ohtsubo Y, Masuda T, Noguchi Y, Yamasue H, Ishii K. A Genetic Variation in the Y Chromosome Among Modern Japanese Males Related to Several Physiological and Psychological Characteristics. *Front Behav Neurosci*. 2021 Dec 2;15:774879.

Matsunaga M, Ohtsubo Y, Ishii K, Tsuboi H, Suzuki K, Takagishi H. Association between internet addiction, brain structure, and social capital in adolescents. *Soc Neurosci*. 2023 Dec;18(6):355-364.

Matsunaga M, Ohtsubo Y, Masuda T, Noguchi Y, Yamasue H, Ishii K. Exploratory research on genetic polymorphisms associated with positive empathy and trait forgiveness among the Japanese. *Neuro Endocrinol Lett*. 2023 Dec 12;44(8):506-516.

Matsunaga M, Ohtsubo Y, Ishii K, Tsuboi H, Suzuki K, Takagishi H. Subjective well-being can be predicted by caudate volume and promotion focus. *Brain Struct Funct*. 2024 Dec;229(9):2315-2326.

Matsunaga M, Ishii K, Ohtsubo Y, Uenoyama K, Noguchi Y, Yamasue H, Suzuki K. Association between loneliness and computation of relationship value appears modulated by autonomic nervous functions. *Neuro Endocrinol Lett*. 2025 Sep 29;46(3):188-197.

Matsunaga M, Kimura M, Hashimoto J, Tominari Y, Ishii K, Tsuboi H, Suzuki K. Effects of blood flow restriction training using plural parallel cuff on walking functions of older people. *Neuro Endocrinol Lett*. 2025 Sep 29;46(3):177-187.

（学会発表）

松永昌宏。遺伝子と社会・文化環境要因との相互作用：社会心理学・神経科学・内分泌学の連携による検討。日本心理学会第83回大会。2019。立命館大学・大阪いばらきキャンパス。

松永昌宏、木村雅弘、橋本純、冨成祐介、石井敬子、坪井宏仁、鈴木孝太。マルチタフを用いた加圧トレーニングが高齢者の歩行機能に与える影響。第83回日本心身医学会中部地方会。2021。ナディアパーク・デザインセンタービル。

Matsunaga M, Ohtsubo Y, Ishii K, Tsuboi H, Suzuki K, Takagishi H. Future subjective well-being can be predicted by the caudate volume and regulatory focus. 第99回日本生理学会大会。2022。東北大学川内北キャンパス。

松永昌宏、石井敬子、大坪庸介、野口泰基、山末英典。孤独感と友人関係の価値判断との関連は自律神経機能により修飾される。日本心理学会第87回大会。2023。神戸国際会議場・神戸国際展示場。

Matsunaga M, Ishii K, Ohtsubo Y, Noguchi Y, Yamasue H. Association between peripheral physiological functions and subjective happiness, loneliness, and depressive symptoms. 第101回日本生理学会大会。2024。北九州国際会議場・西日本総合展示場。

(特許)

特になし

(その他)

特になし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費補助金 基盤研究(B)「能動的推論による自然の防御シグナルとしての孤独感の検討」
(2023年度～2025年度) 研究代表者

○所属学会

日本心理学会、日本公衆衛生学会、日本衛生学会、日本生理心理学会、日本ストレス学会、日本神経科学学会

○自己評価

基盤研究(B)の最終年度である今年度では、これまでの成果を2編の論文として国際誌に載せることができた。この実験結果をもとに、研究代表者として次年度からの基盤研究(B)も採択されたので、今後は新たな研究の成果を発信できると考えられる。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

2026年度から新しく設置される「健康情報学コース」の中心を担う教員として、新コースでの教育内容を充実させるとともに、入試広報課と連携し、オープンキャンパスや高校訪問を通じて高校生・教員に認知度を高める活動に努める。

【計画】

大学事業計画に基づき、学部長の指導の下で学部運営に尽力する。

○学内委員等

地域創造研究所「健康とデータサイエンス研究部会」

入試委員会、教養教育センター運営委員会、男子サッカー部部長

○自己評価

着任初年度ということで大学運営に関しては分からないことが多くあったが、学部長の指導の下学部運営に積極的に取り組み、貢献できたと思われる。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

地域団体、市町村、地域の企業に協力し、地域住民と交流する。

【計画】

名古屋市名東区役所、名東区北部/南部いきいき支援センター、安城市社会福祉協議会などと連携し、地域での介護予防イベント、介護予防教室などを実施するとともに、中北薬品、栄新薬など、名古屋市を中心に展開する企業と産学連携し、地域貢献を行う。

○学会活動等

日本抗加齢学会に参加し、アンチエイジング分野における最新の情報を収集した。

○地域連携・社会貢献等

名東区北部いきいき支援センターと連携し、2025年11月14日（金）に名東区在住の高齢者を対象とした健康・介護予防フェスタ2025にて、愛知東邦大学のブースを出展した。また、2026年1月16日（金）、30日（金）には、安城市社会福祉協議会と連携し、安城市在住の高齢者を対象とした介護予防イベントにて、愛知東邦大学のブースを出展した。

また、長久手市地域保健対策推進協議会委員、長久手市地域包括ケア推進協議会委員として、長久手市の事業に対して助言を行った。

中北薬品株式会社の管理栄養士に大学で講演していただいたり、愛知電子工業株式会社と一緒に介護予防イベントでブースを出展したりするなど、名古屋市を中心に展開する企業と産学連携も行った。

○自己評価

愛知東邦大学の教員として、地域との関係性を深めることに貢献できた。また、これらの活動に学生にも同行させることで、学生の地域への関心や、社会貢献の意識向上にも教育的な効果が見られた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自分の知識・技術を研鑽するためのセミナー（神経伝達調整治療セミナー）に積極的に参加し、スキルアップに努めた。

VI 総括

2025年度は、愛知東邦大学人間健康学部への着任初年度として、教育・研究・大学運営・社会貢献の各分野において基盤を築く一年となった。

【教育活動について】

担当した「環境保健論」「人間健康特講Ⅱ」をはじめとする複数科目において、健康状態を可視化する機器を用いた体験学習や外部講師の招聘、学外での実践的活動を積極的に取り入れた。その結果、授業評価アンケートでは「環境保健論」において4.73点、「人間健康特講Ⅱ」において4.5点（5点満点）という高い評価を得ることができ、学生の学びへの関心喚起という目標は概ね達成できたと考える。一方で、配布資料の分かりやすさについて学生から指摘を受けたことは真摯に受け止めており、次年度に向けて教材の改善を図ることが喫緊の課題である。「学生とともに学び、ともに成長する」という姿勢を忘れず、引き続き教育の質向上に努めていきたい。

【研究活動について】

本年度は科学研究費助成事業（基盤研究 B）の最終年度として、孤独感と自律神経機能の関連、ならびに主観的幸福感と脳構造に関する2編の論文を国際学術誌に掲載することができた。また、これらの成果を発展させる形で、次年度からの新たな基盤研究（B）「能動的推論による自然の防御シグナルとしての孤独感の検討」の代表者としても採択を受けた。健康情報学の視点から、脳科学・神経科学・遺伝学を統合した研究を継続的に推進することで、現代社会における孤独感・幸福感・社会的感情という重要な健康課題の解明に貢献していきたい。

【大学運営・学内業務について】

着任初年度ながら、学部長のご指導のもと、2026年度設置予定の「健康情報学コース」の設置準備に積極的に関与することができた。本コースは、デジタルヘルステクノロジーが急速に進展する時代において、本学の人間健康学部が社会に発信できる独自の強みになるものと確信している。入試委員・教養教育センター運営委員・男子サッカー部部長など複数の役職においても、誠実に職務を遂行できるよう努めた。次年度以降は本学への理解をさらに深め、組織の発展に一層貢献できるよう取り組んでいく。

【社会貢献活動について】

名古屋市名東区・安城市・長久手市における健康増進イベントや協議会委員活動を通じ、大学と地域社会との橋渡し役を担うことができた。特に、これらの活動に学生を同行させることで、学生自身が地域社会の課題を肌で感じ、社会貢献意識を育む機会を提供できたことは、教育的にも意義深い取り組みであったと考える。「地域に根ざした大学」という愛知東邦大学の理念を体現するために、今後も継続的・発展的な地域連携活動を推進していきたい。

【来年度に向けて】

デジタル化・超高齢社会・多様な働き方という時代の転換点において、健康情報学が担う役割はますます大きくなっている。教育・研究・社会貢献の三位一体の活動を通じて、愛知東邦大学ならびに人間健康学部のさらなる発展と社会的使命の遂行に全力を尽くしていく所存である。

以上